

## 第36回全十勝小中学校学級学校・学習新聞コンクール総評

十勝中学校文化連盟新聞専門部長  
審査委員長 福留克志

全十勝小中学校学級学校・学習新聞コンクールは、今年で36回目を迎えることとなりました。今年度も各学校で新聞づくりに励む児童生徒のみなさんのすばらしい作品が、学校・学級新聞部門と学習新聞部門合わせて600作品を超えました。中学生の参加が減少しているのは残念ですが、コロナ禍が明けて新聞作りに取り組む学校が増えてきたことはうれしい限りです。これまでの伝統を引き継ぎ、実績を積み上げてきた十勝全体の意識の高さを感じます。

新聞製作の活動は、記事の題材を探し、それについて取材したり、自分で調べたりして文章にまとめ、発信する、というものです。これは同時に、今までのいろいろな学習で身につけてきた「読み書きしたり、考えたり、それをまとめる」という知識・技能を総合的に活用し、発揮する活動でもあります。また、更に自分自身を見つめ直したり、仲間づくりをする場でもあります。ただ、現在は教科授業時間の確保の面や取り組める環境が厳しく、よい作品に仕上げるにはたくさんの知恵と工夫が必要となります。

今年のコンクールの審査会は、今まで同様、審査員全員、みなさんの新聞づくりに対する熱意を感じながら全作品に目を通しました。

審査は、「内容・企画力」と「編集技術」の2つの大きな観点を基本にそれぞれの学年の発達段階に合わせて行っています。内容・企画力の面では、学校や学級の創造性や独自性があるかどうか、社会問題などタイムリーな内容となっているか、地域性が打ち出されているか、取材に基づき、説得力のある内容であるか、さらに学年に応じた技能が上手に活用されているかなどです。具体的には、身近な出来事や調べたことをありのままにわかりやすく、そして生き生きと表現されているか、などのポイントについて、編集技術面ではレイアウトなど読みやすい紙面構成か、見出しなどに工夫があるか、文字は見やすく丁寧に書かれているか、誤字脱字がないか、などの点を総合的に審査しました。

今年度の新聞も、過去の優秀作を参考によい面を取り入れ、まずその技術力の高さに目を見張りました。今年の特徴としてまずあげられるのは、小学校低学年の頑張りです。身近な話題を取り上げ、自分たちの目線でしっかりと記事に仕上げていました。また、文字も丁寧に書かれており、時間をかけた様子がうかがえます。応募作品全体的には、バラエティに富んだ話題を取り上げ、読み手を強く意識した新聞が多く、レイアウトはもちろん、色使いや見出しに数多くの工夫が見られたものも多くありました。特に学習新聞では、自分の目を見たことをそのままわかりやすく表現するとともに、さらに自分で調べて詳しくわかりやすく文章にしたものやカラーを効果的に活用し、目を引く工夫をした作品も多かったです。字のデザインを工夫したり、カラーを使うことは、読み手の目を引く方法としてはとてもよい表現の仕方ですが、あまりに凝り過ぎて読みにくくなったり、雑に色塗りしてかえって雰囲気壊している新聞も見られました。また、段の途中や文章の中に空白のスペースをたくさん作ってしまうのも見た目によくありません。

また、新聞で一番意識しなくてはいけないことは「読み手」に向かって発信するという基本です。記事に合った見出しは「タイトル」そのものでは伝わりません。記事の内容が一目でわかるものにするだけで仕上がりが数倍よくなります。さらに記事の理解を助けるためのイラストや写真、図表やグラフの工夫も大事になります。今後意識することとして

- ・題字や記事の字や色や地紋は、面倒がらずに丁寧に書き、読みやすく仕上げる。
- ・新聞の周りを囲む「外囲みケイ（輪郭ケイ）」や記事の段の間に入れる「段ケイ」はもれなく入れ、メリハリのある形に仕上げる。

最後になりましたが、この新聞作りに対しまして、いつも熱心にご指導を頂いている先生方、保護者の方をはじめ、関係するすべての方々に心より感謝を申し上げますとともに、今後とも変わらぬご協力をお願い申し上げます。「総評」といたします。